

総合的地域研究の概念

1. 研究組織

研究代表者：高谷 好一（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：應地 利明（京都大学文学部・教授）

掛谷 誠（京都大学アフリカ地域研究センター・教授）

松原 正毅（国立民族学博物館・教授）

家島 彦一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

阿部 健一（京都大学東南アジア研究センター・助手）

2. 研究のねらい・目的

研究代表者である高谷は、世界は固有な性質をもついくつかの地理的単位からなると考え、「世界単位」の概念を提出した。これは生態を基盤とする「風土」、人間の物質的・精神的営為の歴史的集積である「文化」、統合装置あるいは紐帯としての「政治」、こういった異なる次元の概念を輻輳させた、conventionalではあるが、極めて確然とした地域の総合概念化の一つの試みである。「世界単位」は、紛れもなく、世界を緩やかに「区切り」、地域性の成立の過程を探る上でのglobalな概念として提出されたものだが、その原初点は東南アジアという一地域に密着した経験から成立したものである。したがって、今年度は、各研究分担者が、高谷の提出した「世界単位」の概念を、それぞれ関わりの深い地域と専門領域に引き寄せ、批判・検証・論考するための研究会を定期的にもち、他地域での妥当性を検討することを主な課題とした。

3. 平成5年度の研究経過

4月4日、第1回研究会を開いた。高谷がスピーカーになって「世界と世界単位」と題して話題提供し、研究協力者の前田成文がこの議論を一步進めた。これには荻野班（地域と生態環境）、坪内班（地域性の形成論理）からの参加者もあり、今後の研究の進め方についてのアドバイスもあった。

6月26日の第2回研究会では、家島が「海が創る文明」について話した。当研究班では、南アジア（應地）、アフリカ（掛谷）、インド洋（家島）、乾燥アジア（松原）、東南アジア（阿部）という地域分けをしているが、家島は担当地区のインド洋を中心に、「海が創る文明」なる概念を提示した。イスラーム商人達が縫合船ダウを使って、いかにアジア、アフリカ、中東をつなぎ、ひとつの海の世界を創ったかを論じた。

9月5日の第3回研究会では、阿部が「森が創る文明」と題して話した。これは家島が取り上げた海の文明に対して森の文明という概念を提出したのである。実際にとりあげた地域は東南アジアであった。熱帯多雨林という暗くて深い森が与えられた時、人々はそこでどんな生業を展開させ、どのように生活し、またどのような精神世界を作るのかを論じた。森という生態が、そこに入った時、人間の心理に与える影響を実験してみるということで、この研究会は富士山の樹海地帯に入って行われた。

9月22日には福岡で、「アジアをどう見るか——自然、人間、そして地域像」と題して、総括班主催の第1回公開講座が開かれたが、そこで高谷は発表し、班の研究成果の一端を披露した。

10月23日には、第4回研究会を行った。話題提供はゲストとして迎えた前田成文氏で、「つなぎを考える」というのがテーマであった。地域を一つの地理的単位にしている力にはいろいろのものがあると考えられる。例えば、中華思想というものも人々をつなぐ力になりうるものだし、キリスト教や仏教などという宗教も力になりうる。そうしたものと比較して、同氏は東南アジアのそれは無数に連なる小さい輪の連鎖であるとして議論を展開した。この研究会は土屋班（外文明と内世界）との合同研究会となった。

1月22日には第5回研究会を行ったが、この時は川喜田二郎氏を講師として迎え、「地域研究とは何か」について話してもらった。ここで出された考え方は、地域は「いのち」のある生き物である、ということであった。こういう「いのち」のある地域をいかにして把握し、どのような手法で描写しうるのかということが議論された。KJ法はこういうことを考える時、かなり有効な手法であるということも多くの人が考えるようになった。

2月4日、5日の両日にわたって、総括班主催の第2回研究集会在催された。そこでの総合テーマは「地域性の成立をめぐる」であったが、当研究班からは應地、掛谷の両名を代表に送った。應地は南インドを論じ、ここでは生態や生業というものよりもヒンドゥーイズムといったイデオロギーが地域を特徴づけるのに意味があったとした。一方、掛谷はアフリカを論じ、そこでは極めて小さな集団が一つの世界を作っていて、そうしたものが無数に存在し、動き回っていると論じた。この研究集会上ではインドのようないわゆる普遍論理を發明した地域と、アフリカのような個別論理を持つ小社会が無数に存在しているような地域とでは、地域を捉える手法そのものもまた別なものでなければならないという結論が出た。これは地球世界のなかでの地域を考えようとする「総合的地域研究」の立場からすると、一歩前進であった。

来る3月30日には本年度最後の研究会を予定している。予定されているテーマは「地域の概

念」である。ここでは應地が地理学において論じられてきた地域の概念についてのレビューを行い、それを基にして、地域研究における地域の考え方について議論する予定である。

文献による研究、研究会での発表・討論などの他に、班員は文部省科学研究費（国際学術研究）などを得て、各自に海外の実地調査を行った。高谷、應地、家島、松原は地中海から中東にかけてを調査した。掛谷はアフリカを、阿部は東南アジアをそれぞれに調査した。

4. 研究の成果とフロンティア

初年度でまず最初にやらねばならなかった仕事は「地域」の概念の決定であった。「地域」という言葉によって、ある人は直径30km程度の、いわゆる生活圏のようなものを想像したし、また別の人はもっと大きな東南アジア地域などというものを考えた。逆に集落のような小さいものを考える人もいた。このなかで最初に行わなければならなかったことは「地域」のスケールに関しての共通の認識を得ることであった。この点に関しては、この班では、東南アジア地域、インド地域といったスケールで議論を進めて行くという確認をした。

その上で、班員がそれぞれに担当した地域の性格を可能な限り明確にした。次のようなことが明らかになった。

東南アジア（担当：高谷、阿部）：東南アジアは基本的に5つの生態の上に5種の社会があるということを提示した。山間盆地を中心にした灌漑水稲社会、デルタの新開拓空間、熱帯山地の焼畑社会、多島海の海民の社会、それにジャワ火山島の高密度社会である。これらはそれぞれに極めてよくまとまりのある社会、文化、生態力学系を作っているの、それらを5つの小地域だとして、それぞれを世界単位と命名した。世界単位は同時に、そこでは人々が世界観を共有する“彼等の世界”でもあるとした。そして、こうした見方での分析を地域研究のひとつの手法としてはどうかという提案を行った。

アフリカ（担当：掛谷）：広大すぎるアフリカを一つの地域とするのではなく、熱帯アフリカを一つの地域としてみようということが確認された。そして、この地域の中に、東南アジアでいうところの世界単位のようなものが提示可能か否かがとわれた。結果は今のところ、否定的である。アフリカでは多くの人たちは極めて小さい集団を作っているの、”彼等の世界”というものを考えようとする時、その単位は極めて小さいものであらねばならず、したがって、世界単位は極端に小さいものにならざるをえないということになった。加えて、この集団は移動を繰り返している。こうなると、世界単位の地理的範囲を決定することは極めて困難である、ということである。

インド（担当：應地）：インドではそれを区分することが不可能であるということになった。東南アジアの場合だと、地域は5つの世界単位に分割できたのである。だが、インド地域はそれ自体が一つの世界単位であるということになった。インドにも多様な生態があり、それに応じた生業がある。多数の言語があり、それに応じた州ができていく。にもかかわらず、インドの分割は困難である、というのである。ここではインドらしさを最も強く出しているのはヒンドゥーイズムであり、カーストの観念であるというのである。インドで主張されたことは、地域というものは生態や文化ではなく、もっと高次のイデオロギーである、ということになった。そして、それに見合うものとして中国が引き合いに出された。

インド洋（担当：家島）：ここでは、いわゆる地域というようなものが根本的に問い直されねばならないような問題が提示されている。インド洋そのものは生活の場にはならないのである。だが、ここはダウ船によって結び合わされた、アフリカからアラビア、ペルシャ、インド、それに東南アジアの海岸が一つのインド洋世界とでもいったものを作っている。それは人とモノと情報が行き交うネットワークによって作られた世界である。地域という言葉が与える土着性や固有性というひびきにまどわされてはならないことをはっきりさせた。もっと、関係の中に作られる世界とでもいった視点の重要性を指摘した。

トルコ（担当：松原）：まだ正式な発表はされていないが、この地域ではいろいろのものが重層的に考えられるはずである。トルコ族の持つ牧畜という生業、イスタンブールという港町の持つ交易性、それにここにはイスラームという大きなイデオロギーが覆いかぶさっている。この重層構造の存在までは班員は認識しているが、松原自身による整理はまだ聞かされていない。

以上が、とりあえずは各地区の性格を明らかにしてみよう、という段階で出てきた研究結果である。各地区の性格はある程度明らかになったと考えられる。

ただ、当初から考えられていた「東南アジアで考えてみた世界単位という概念の適用は可能なのか否か」ということに関してはまだ、結論は出ていない。否定的な意見も出ているし、多少の変更を加えて適用可能であるという意見も出ている。

5. 今後の課題

この班のねらいの一つは、どのようにしたら正しい世界認識を得ることができるのか、ということである。そのための、一つの具体的な分析単位として世界単位なるものを提唱してみたのである。そして、その当否は上に述べたような状況になっている。

この段階において、問題の解決に役立つかもしれないということで提案されているものは、この地球上には類型を異にする3種の世界単位群があるのではないかということである。それは仮に生態型世界単位、ネットワーク型世界単位、文明型世界単位というふうに言ってもよいかも知れない。

この地球は基本的には4つの大きな生態からなっている。第一は砂漠と草原が作る乾燥帯である。第二は赤道直下と寒帯、亜寒帯にある森林である。第三は中国やインドのような野の空間である。第四は海である。第一の乾燥帯や第四の海は、大人口はそこでは住みえないが、人やモノや情報の動き回る空間である。家島がインド洋で議論したような世界である。そういう所ではネットワーク型の世界単位というようなものが考えられないだろうか、ということである。第二の森林世界はまさに森林という生態の生きている空間であり、そういう所で、いわゆる東南アジアでいう世界単位が出てきているのである。これを生態型世界単位として考えてみてはどうか、ということである。第三の野の世界はインドのように大人口に溢れ、人々が作りだしたイデオロギーが人々を縛っている空間である。これはまた別の類型、文明型世界単位として、別途考えてみたらどうだろうか、という考え方である。

こういう考え方で、とりあえず世界を生態によって大きく区切ってみて、その後で地域をそれぞれ独自の世界単位にくくりなおし、もう一度考え直してみる。このようなことを今後試みてはどうかと考えているところである。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

高谷好一

「『地域』とは何か」矢野暢編『講座現代の地域研究第1巻 地域研究の手法』弘文堂, pp. 23-45, 1993.

「『世界』を区切る旅」矢野暢編『講座現代の地域研究第3巻 地域研究のフロンティア』弘文堂, pp. 3-25, 1993.

「人類の過去・現在・未来」矢野暢編『講座現代の地域研究第4巻 地域研究と「発展」の論理』弘文堂, pp. 249-272, 1993.

「世界のなかの「世界単位」」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂（印刷中）

「中華世界」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』弘文堂（印刷中）

應地利明

「南アジアの都城思想——理念と形態」板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』日本学術振興会, pp. 209-225, 1993.

「ニジェール川内陸デルタの稲作——アジア研究者の視点から」佐々木高明編『農耕の技術と文化』集英社, pp. 66-81, 1993.

「シルク・ロードと犁——トルキスタン型インド犁をめぐる東西交流」『西南アジア研究』38：3-16, 1993.

「タイにおける稲作慣行農法と犁の調査——犁耕の起源とも関連させて」『東南アジア研究』31(2)：104-131, 1993.

「インド」矢野暢編『講座現代の地域研究第2巻 世界単位論』（印刷中）

「世界に誇るデカンの雑穀農耕」辛島昇他編『ドラヴィダの世界』東京大学出版会, 1994, 4月発行予定
松原正毅

「草原の風——アルタイのトゥワ族」『月刊百科』10月号：4-9、11月号：10-15、1月号：31-37、
平凡社.

掛谷 誠

「ミオンボ林の農耕民——その生態と社会編成」赤坂賢他編『アフリカ研究——人・言葉・文化』世界思想社, pp. 19-30, 1993.

「ベンバ族」綾部恒雄監修・信濃毎日新聞社編『世界の民 光と影(下)』明石書店, pp. 113-121, 1993.

家島彦一

「インド洋海域の交易都市ネットワーク」板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』日本学術振興会, pp. 96-112, 1993.

「国際交易ネットワーク」『バクス・イスラミカの世紀 新書イスラームの世界史②』講談社現代新書, pp. 227-259, 1993.

「インド洋貿易」川北稔編『歴史学事典 第1巻(交換と消費)』弘文堂, pp. 37-44, 1994.

「イブン・バットゥータ『メッカ巡礼記』の諸写本について」『東西海上交流史研究』3：115-139, 1994.

「チュニジアの定期市サークル」家島彦一編『イスラーム圏における異文化接触のメカニズム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 130-160, 1994.

「人間動態と情報に関する総合的研究——問題提起」家島彦一編『イスラーム圏における異文化接触のメカニズム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 5-12, 1994.

「都市・国家・海域——イエメン・ラスール朝スルタン・ムザッファルのズファール遠征の事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』46・47, 1994(印刷中).

阿部健一

「スマトラ泥炭湿地林の近代——試論——」『東南アジア研究』31(3)：191-205, 1994.